
青空を遠い目で見ながら

バルセン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空を遠い目で見ながら

【コード】

N0016E

【作者名】

バルセン

【あらすじ】

ある公園の真ん中、彼はある男に土下座されていた！

(前書き)

お試し的な意味で初めて投票してみました。
わりと勢いで書いたので微妙かも。

それからレナードは僕が協力する気がないと分かったのか潔く帰っていった。

その時の捨てられた子犬のような背中とはなかなか面白かったといえよう。

そう、僕はレナードの言った通りドがつく鬼畜である。

ほら、人が苦しむ様って楽しいじゃん？

そんな誰に話しかけるわけでもなく空に話しかけていると近くで複数の悲鳴が聞こえる。

「うわあああああ！」

今日もか。

僕はそう思いながら悲鳴の方向へと向かう。

何故か深い霧の中のそこには5m程の身長をしたオーガに似ている化け物がいた。

僕は目標を視認すると懐の仮面を付けてからすぐに魔法の詠唱を始める。

『来たれ、灼熱の炎蛇』

短い、確かに威力のある炎を化け物に向けて複数発射する。

「！？」

この世のものとは思えないような悲鳴をあげて化け物はこちらにつっこんでくる。

辺りには死体が焼けたような醜悪な臭いがする。

僕はさらに魔術の詠唱を続ける。

『堕ちよ、冥界の門』

落とし穴の要領で化け物の足元に黒い穴を作る。
弱い相手にしか使えない呪文だが、この化け物には効果があったよ
うだ。

「……………」

化け物はすぐに自分が落ちたことに気付くが、既に遅い。
僕は化け物が無限の落とし穴に落ちたことを確認するとその穴を塞
いだ。

「ふう……………」

「ロキ様ー！」

あー、と呟いて周りを見る。

そこには僕を尊敬するかのような顔ぶれがたくさんある。
今の時代、未確認生物である化け物が突然霧から現れる。

霧がなんであるかは分かってなく、また化け物があるかもし
明だそうだ。

そして人類の30%くらいの確立で生まれる異能力者。
彼らは魔術を使い、化け物と戦う日々を送っている。

彼ら魔術師の95%は警察となり、日夜化け物退治に勤しんでい
るのであった。

だが僕は別にそんなのになる気はないし、今は学生なので仮登録で
化け物退治をしている。

そこからそこそこ人気になって王子様的な扱いを受けることになっ
た。

ん？どれくらい前から霧が発生したかって？

はっはっはっ！実はもう2000年前くらいなんだよ！

最近だと思つた人は馬鹿だね！

え？ロキって誰かつて？

それはもちろん僕が化け物退治をする為の偽名だよ。

今ではアカレンジャー並に有名になってカードまで作られている始末である。

まあばれてないからいいや。

「ただいまー」

僕は誰に言うでもなくそう言つて家のドアを開けた。

これは習慣というか……別に意味はない。

ただ周囲の人が誤解してくれるような、そんな嬉しい自体を期待しているだけである。

「無駄な時間食つたなあ……お、入金されてる」

携帯電話の機能でミラという名前の口座を確認すると100万程の入金が確認された。

これはさっきの化け物を倒した時の報酬である。

これがやたら強かつたりすると1000万程になるのだが……

医療費は自己負担なのである程度腕に自信がないと赤字になること間違いなしだ。

とりあえずこれではらくの生活費は約束された。

「明日は終業式か。そして翌日に修学旅行……忙しいことだな」

この学校はよほど変わっているのか一学年に修学旅行が3回くらい

ある。

しかも航空費や宿泊費は全て学校が負担しているというから、
どうやって利益を出しているのか僕でも予測不可能である。

「風呂は明日でいいか」

疲れていて面倒なので朝風呂ということそのままベッドに直行す
る。

ベッドに身を投げるようにしてダイブする。

しかし勢いあまり過ぎたのかそのまま壁にぶつかる。

「……痛いな」

当たり前のことを言いながら眼を閉じて寝る準備をする。

あ、そういえば服着替えてないや。

翌日、学校の教室に來ると白い目を向けられ、白く燃え尽きたレナ
ードがいた。

周りの会話から察するに昨日言っていたことを実行したようである。
捕まらなかったただけでもマシではないだろうか。

「おはようレナード君。朝からご機嫌麗しゅうございます」

「麗しくねえよ！ってか知ってて言ってるんだろこの野郎！」

「あっはっはっはっ。何のことかな？」

「ミリアアアアアアア！」

朝から元気なことだ。

僕はレナードの復活を確認すると席にカバンを置いて中身を取り出す。

ちなみに席はレナードの隣である。

「……なんでカバンの中に大量のハイチュウが入ってるんだ？」

「……素で間違った」

それから「何をどうしたら間違っただよ！？というか本来の用途は何なんだ！？」と言うレナードを避けながらも講堂へ向かう。そろそろ講堂に集まらなければいけない時間だ。

「会長！S級要注意人物ミラを発見しました！」

「よし！捕まえるわよ！全員突撃！」

講堂へ向かう途中、何やら怪しげな連中が僕に向かって全速力で走ってくる。

ちなみに怪しげと表現したが彼らは立派な生徒会である。

生徒会長のルミル「ソーコライという人物を筆頭に校則違反者を取りしめる集団だ。」

「また何かをしでかす前に取り押さえないさい！いいい、いや！殺し

なさい！」

「……了解です会長！」

「お前！また何かしたのか！？」

「何かしたとは失礼な。せいぜい昨日のルミル会長の弁当にフリカケでハートマークを付けただけだ。

『あなたの愛しのダーリンより（はあと）』って」

「十分したじゃねえか！」

レナードは僕と共犯と思われているのか一緒に追いかけられている。

「おかしいなあ……喜ぶと思ったのに」

「あれのせいでクラスで恥をかいたわよ！弓隊！構え！」

レナードの顔が一気に真っ青になる。

「ミラ！謝れ！今ならまだ間に合う！」

「えー」

僕が文句の声をあげた瞬間にそれは言われた。

「放て！」

「ぎゃああああー！」

レナードが悲鳴をあげながら矢に当たるのが見える。
矢の先は丸いゴムのようなものが付けられており、殺傷能力はない
ようだが物凄く痛そうだ。

「あっはっはっはっ！甘い……甘すぎるわぁ！」

「きいいいいい！魔術を使いなさい！許可するわ！」

「はっはっはっ！そうこなくてはな！」

さらに挑発するかのように笑い声を上げる。

ルミル会長以外は一瞬一般人に魔術を使うことに戸惑いを見せたが
すぐにルミル会長に続く。

我先にと魔術を詠唱したルミル会長から炎の弾が僕目掛けて飛んで
くる。

「当たり前なさいミラ！」

「はっはっはっ！狙いが甘いわ！」

ヒョイと首を横に倒すと炎の弾が横を通過して行った。

「魔術師でもなくせにっ！」

「何、魔術に頼る奴なんぞに負けんさ。つまりルミル会長が弱いだ
けということだ」

「今日こそはミラを仕留めるわよ！そして学校……いや、私に平穩
をもたらすのよ！」

おお！ルミル会長が本音を出している。
どうやら昨日の悪戯はそうとう堪えたようだ。
そろそろ鬼ごっこに飽きてきた僕は曲がり角を曲がるなり横にあっ
た秘密の道の中に入る。

これは巧妙な魔術で隠蔽されており、僕以外が入ろうとすると壁に
戻るものだ。

普段見るとただの壁にしか見えない。

「また逃げられたわ！ミラはいつもいっつもどこに消えるっていうの
よ！」

「はっはっはっ！」

「はっ！また声が聞こえたわ！きっと見えるところから私のことを
馬鹿にしているに違いないわ！」

一見聞くと物凄く被害妄想が溢れているが事実なだけに鋭い勘をル
ミル会長はお持ちようだ。

僕はそのままゆっくりと秘密通路を通りながら講堂へと向かった。

ちなみに講堂の中に入ると既に終業式は始まってたらしく、僕は注
意されながら席についた。

ちなみにレナードは帰ってこなかった。

(後書き)

「え？もうこれで終わり？」って人へ。

これは思いつきで書いたもので、特に続きは考えてません。

もし続きを望む人がいたら、気が向いた時に書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0016e/>

青空を遠い目で見ながら

2011年1月19日15時10分発行